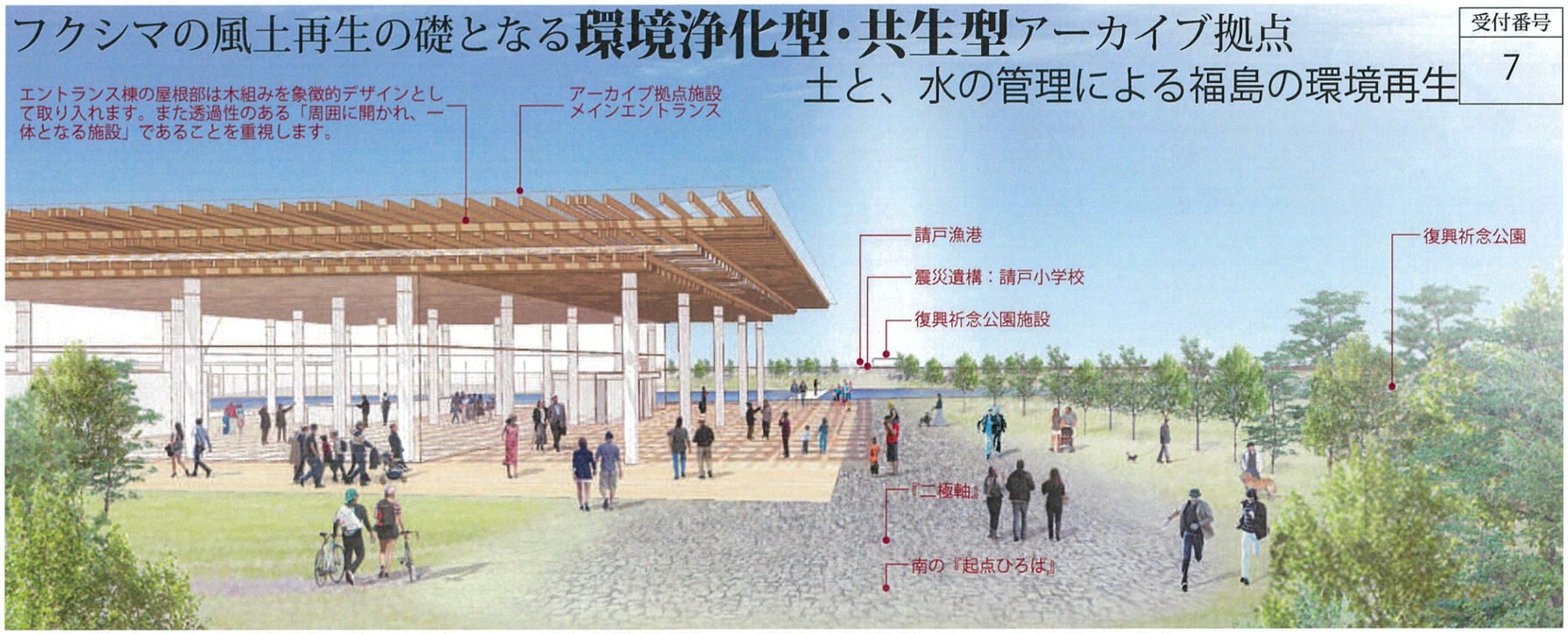
受付番号
7

フクシマの風土再生の礎となる**環境浄化型・共生型**アーカイブ拠点
土と、水の管理による福島の環境再生



1）復興の拠点としてのアーカイブ拠点施設の配置のあり方について　　2）複合災害の記憶を未来へ継承するための建築物としてのあるべき姿について -①

祈念公園など周辺エリアを含めた全体への提案

原子力災害を私たちが受け止める機会ととらえる。

起きてしまった原子力災害を、被災者も私たちの社会も、うまく受け止められずにいます。この「東日本大震災・原子力災害アーカイブ拠点」をみんなで考え、つくり上げ、運営することを通じ、未曽有の災害を個々の被災者の心と社会的に位置付ける取組みに繋げます。

「広域的・長期的なネットワーク型施設構想」の提案

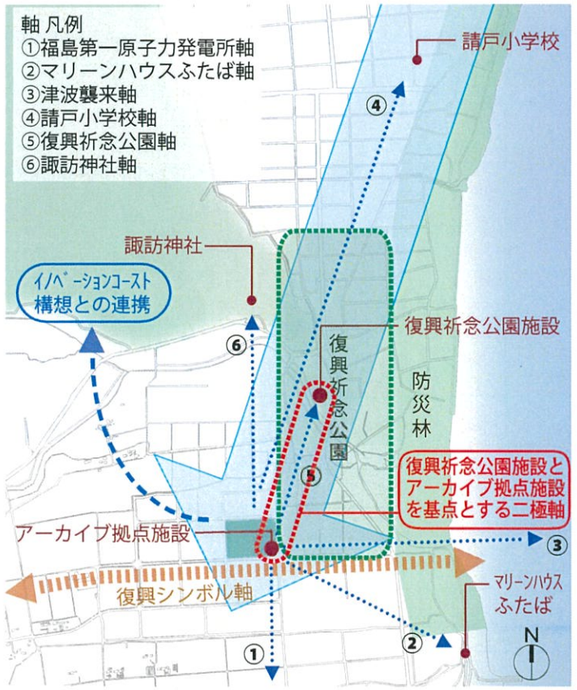
- 人の身体・記憶・心が切り離せないように、**「災害遺構」「アーカイブ拠点」「祈念公園」の一体的整備**が重要です。復興祈念公園との一体的整備を提案します。
- 進行中の災害のため、今後も順次災害遺構が増えることを前提に、長期的構想を踏まえ計画します。

※例えば、数十年後福島第一原子力発電所は重要な災害遺構となる可能性があります。

『二極軸』による中心施設の構築と遺構ネットワーク

①『復興祈念公園施設』『アーカイブ拠点施設』を結ぶことで『二極軸』を構成し、**広域的中心**を構築します。
②『二極軸』を中心として、請戸小学校・諏訪神社・マリーンハウスふたば・海岸防災林などの災害遺構がネットワーク化され、回遊できる施設群の整備を提案します。
③ｲﾉﾍﾞｰｼｮﾝｺｰｽﾄ構想を視野に広域ﾈｯﾄﾜｰｸを構築します。

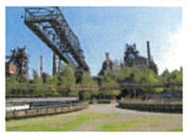
■周辺施設とのネットワークイメージ図



ネットワーク型遺構施設としてイメージする例

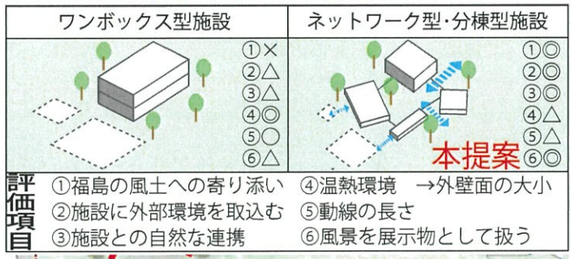
IBA エムシャーパークプロジェクト（ドイツ）

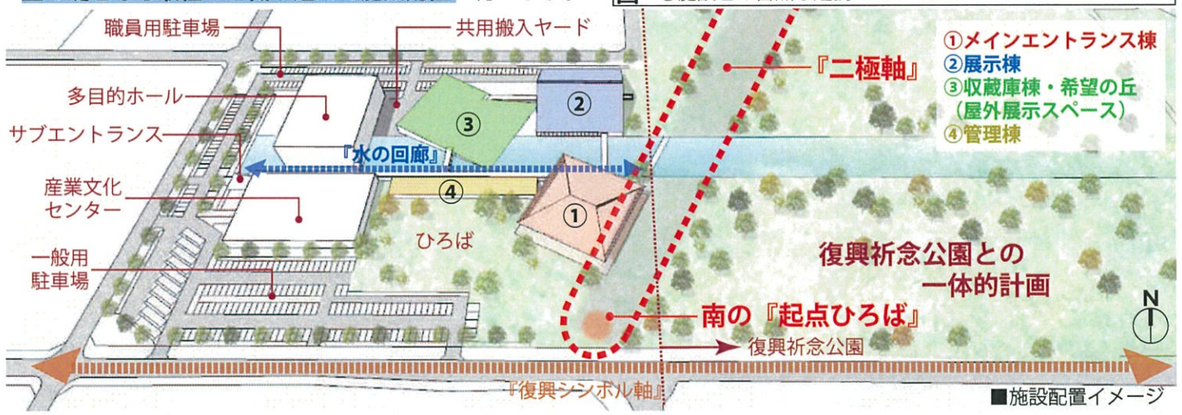
・衰退し汚染され荒廃しつつあった重工業地域の**環境再生**をキーワードにした広域プロジェクト。廃棄された施設を産業遺構として保存、公園に見立て観光資源として再生。**環境浄化・環境共生・遺構施設保存・広域エリア再生**と本エリアとの共通点も多い。



『福島の風土』に寄り添い、『福島の風土』の再生を担う、アーカイブ拠点施設の配置の在り方

- 広域のエリア運営や周囲の多様な施設との柔軟な連携のため、**ネットワーク型・分棟型施設**とします。
- 被災者のみならず福島県民みんなの心の拠り処として、**福島の風土に開き、風土に寄り添う**施設づくり・施設配置を行い、福島復興を牽引する施設を目指します。
- 風土に開き・寄り添う施設とするための学術的・技術的バックアップ・検証を慎重に行い、**福島の環境浄化・再生の礎となる取組みを織り込んだ施設配置**を行います。





■施設配置イメージ

「土と水で地形をつくる」「木を組む」「石を積む」

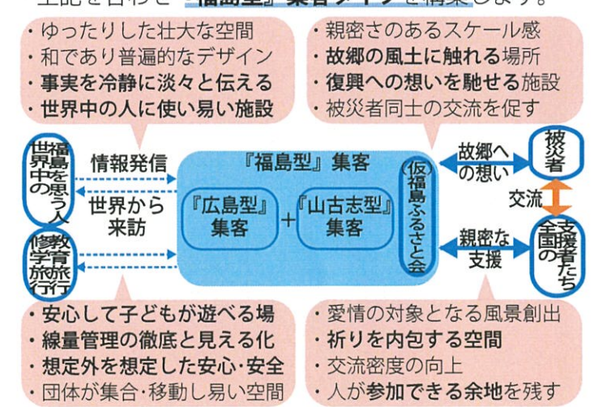
- 土と水の特性（放射線遮蔽性の高さ）を活かし、**安心（線量の低減・見える化）と美を備えた地形**をデザインします。
- **「建築原初の力強さ」を重視**し、木組により「絆」を表現し、石積により「強さ」「丹念さ」を表現します。

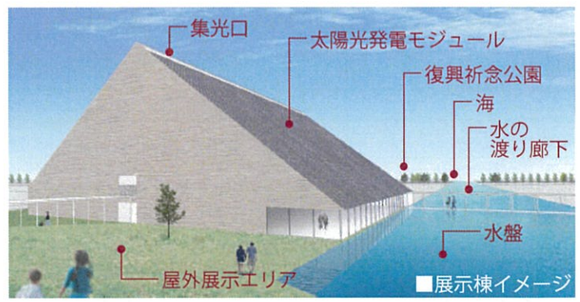
敷地内の施設を結ぶ水盤の軸「水の回廊」

- 風に波立ち光を反射し雨に泡立つ、**福島の風土を映す「水盤」を中心とした配置計画**とします。
- 全ての雨水排水を水盤に落し、万一の際の線量管理・遮蔽低減装置とし、**線源浄化の仕組を見える化**します。
- 敷地内の３施設と、更に復興祈念公園との連携を図るため、**「水の回廊」**を設け、交流密度を向上させる諸室配置を行い、多様な人的交流を促進します。

『広島型』『山古志型』を組合わせたネットワークづくり

- **「広島平和記念資料館」**と同様、当施設は外国人客や修学旅行の関心を集める事が可能です。**環境浄化型施設**として、外国人客や教育旅行客の安心に配慮します。
- **山古志村「郷見庵」**の地域を支える会**「ふるさと会」**の遠方支援者たちは、支える当事者としての意義を感じ参加します。**「支援する余地」のある計画**とします。
- 上記を合わせ**『福島型』集客タイプ**を構築します。





■展示棟イメージ

３）施設利用形態の変化に対応した施設整備と各エリアの連携及びセキュリティを考慮した利用動線のあり方について

空間方針①管理区画の明確さ・利用者動線の明解さ

・部門毎の分棟型とし、管理区画を明確化します。
・水の回廊は敷地全域で利用者動線の利便性向上に貢献

空間方針②福島の風景に寄り添い，人が出会い交流する

・施設の様々な空間に、福島の自然・四季を感じ「失われた暮し」に思いを馳せる場所を多く設けます。
・来館者を始め、語り部・ボランティア・研究者・職員…、様々な人たちの交流を促す施設計画とします。

空間方針③新しい社会が見える「環境浄化型・共生型」

・この苦境を乗り越えた先の**新しい社会の在り方「福島型環境共生」**が見える建築を目指します。

想定外に備え空間内放射線環境に建築的に出来ること

・福島での放射線調査活動を継続する**環境工学研究チーム**と協働し、調査結果から知見を導入・検証し、福島再生に貢献する学術的・技術的確立に取組みます。

■技術確立フロー

・上記の体制の元、想定外の事態への対応を計画します。

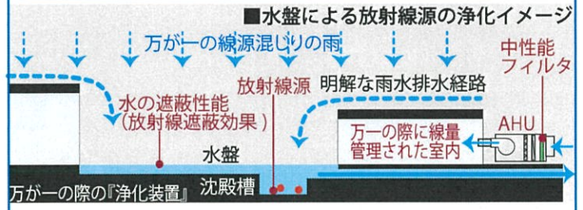
「想定外・万が一への備え」

〈万が一の備え①〉**廃炉作業過程で塵が舞う場合**を想定し施設（或は風除室）を**加圧状態**とし侵入を遮断します。

〈万が一の備え②〉導入外気中の塵は空調機の中性能ﾌｨﾙﾀで十分に捕集出来ます。 **→気密性確保と計画的換気**

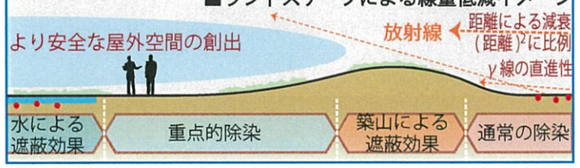
〈万が一の備え③〉雨水排水経路を明確化し水盤と共に集中的に管理し、水の遮蔽効果により線量を低減します。

■水盤による放射線源の浄化イメージ

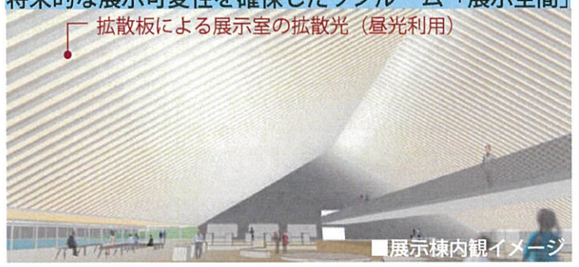


〈万が一の備え④〉γ線飛距離・土・水の放射線遮蔽性を前提に外構ﾃﾞｻﾞｲﾝし、局所的に**「更なる線量低減ｴﾘｱ」**を作ります。**万一の再汚染**の場合にも、雨水排水の管理・築山の遮蔽性により線量コントロールが可能です。

■ランドスケープによる線量低減イメージ

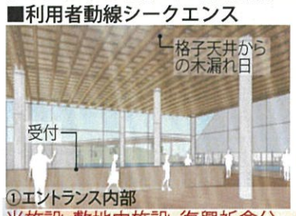


将来的な展示可変性を確保したワンルーム「展示空間」

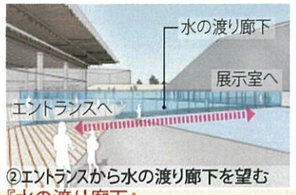


■展示棟内観イメージ

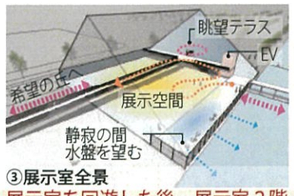
■利用者動線シークエンス



①エントランス内部
当施設・敷地内施設・復興祈念公園の玄関としても機能し、多目的ホールとしても運営可能。

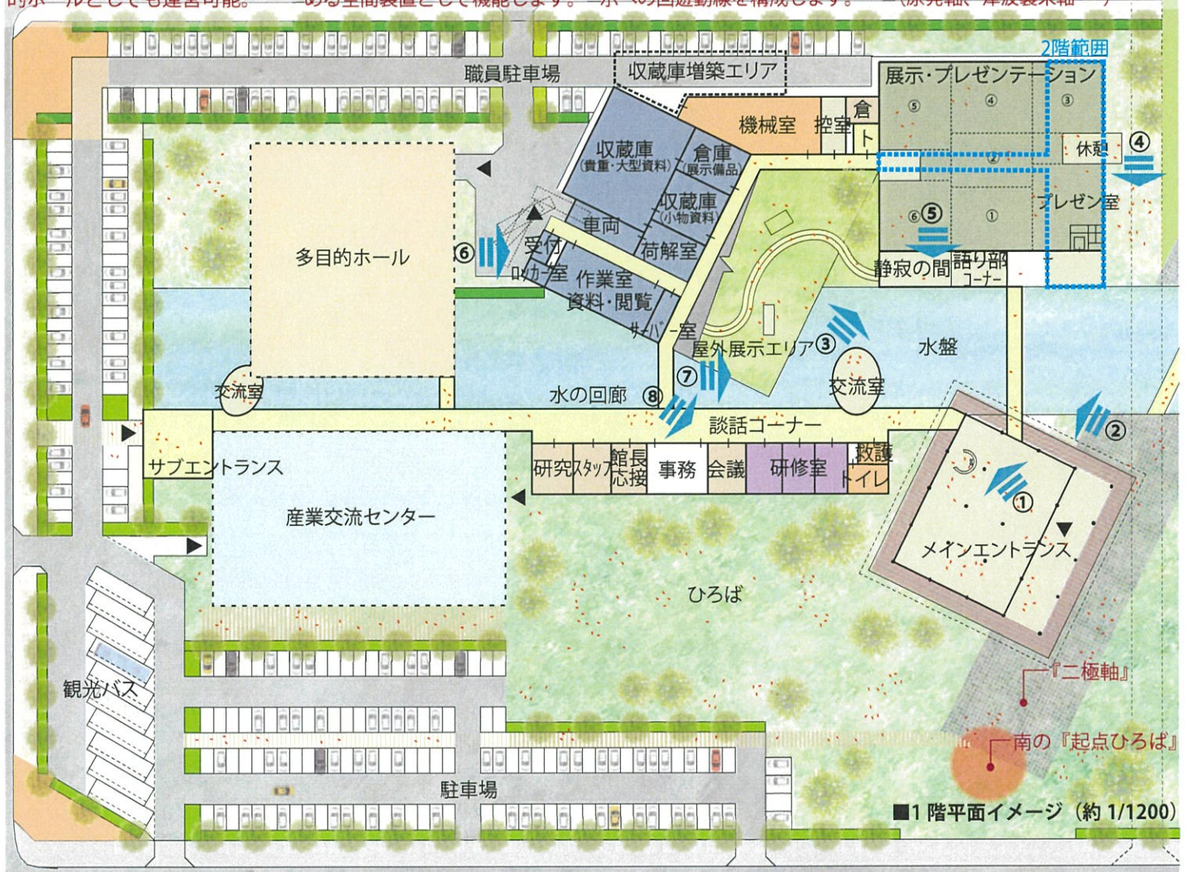


②エントランスから水の渡り廊下を望む
『水の渡り廊下』展示室に臨む気持ちを切り替え鎮める空間装置として機能します。

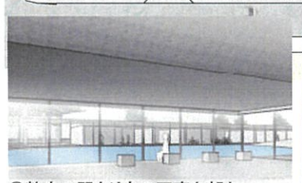


③展示室全景
展示室を回遊した後、展示室２階（眺望テラス）を経由し、屋外展示への回遊動線を構成します。

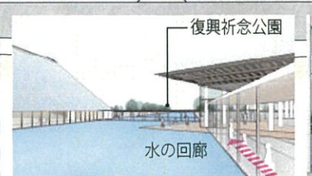
④眺望テラスより1Fを望む
様々な軸線が遠望できる眺望テラスを上階に設置します。（原発軸、津波襲来軸・・・）



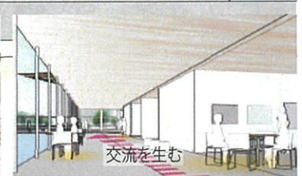
■1 階平面イメージ（約 1/1200）


⑤静寂の間より水の回廊を望む
展示室内に福島の風景・風土を取り入れ、「静かに想いを馳せる場所」を多く設けます。

⑥希望の丘・屋外展示（下部収蔵庫）
屋外展示エリアからは水盤の軸により、復興祈念公園と防災林、海への眺望を確保します。



⑦復興祈念公園と繋がる水の回廊
『水の回廊』敷地内の様々な施設や来館者を有機的に連携させます。

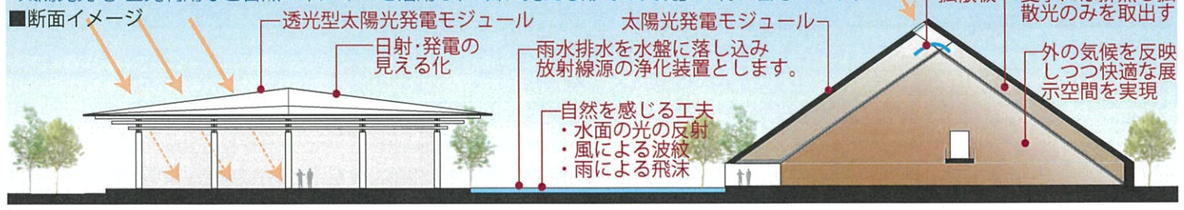


⑧研修室・談話コーナー
『研究室・事務室廻り』様々な人たちの交流密度を上げ、賑わいを創出する設えとします。

環境浄化型・共生型建築として「未来を志向するデザイン」…様々な形で自然を取り入れ「見える化」する。

・「線量測定と線量の見える化」を徹底します。　・万が一の事態に備え「水による管理」「換気」に留意し環境浄化型施設とします。
・太陽光発電・昼光利用など自然エネルギーを活用し、「目に見える形での実現」に特に留意します。

■断面イメージ



４）保存資料の多様性を踏まえた新たな資料保存エリアのあり方

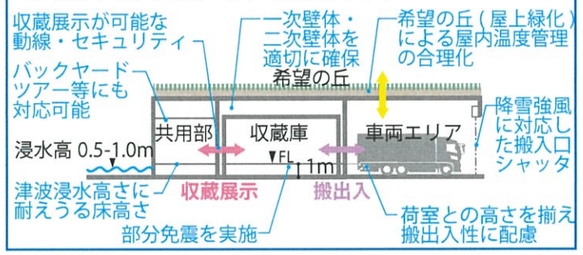
受付番号
7

長期保存と高度なセキュリティを実現する多彩な技術が揃う資料保存エリアを構築

多様な資料を後世に伝えるための保存環境を整えるものとし、耐火性、防犯性、恒温恒湿性、空気清浄性、防虫防カビ性はもとより、地震対策、浸水対策についても十分な機能を果たすものとします。

■機能的な資料保存エリアイメージ

・保存資料は**セキュリティレベルの異なる管理が可能**なものとし、収蔵物の種類、数量により、設計時において適切な保存エリア分けを再検討すると共に、将来の保存資料の増加に適応できるよう**増床を見据えた計画**を行います。
・一次壁体、二次壁体を適切に確保し、空気調和設備の機能性向上を担保、長寿命化を図り**資料の長期保存を実現**します。
・特に断熱性の向上を図り、内装材には吸放湿性の高い仕上材を採用することにより、調湿性と温度変化を安定させ、**空調機器類への依存度やランニングコストの低減**を図ります。
・資料保存エリアの**床高さはＧＬ＋１ｍ**とし、車両荷室からの搬出入のし易さに配慮すると共に、将来の津波浸水高さ（0.5～1.0m）にも耐えうる計画とします。
・多種多様な資料の保存に対応可能なＩＰＭ（**総合的有害生物管理**）や**長期管理計画、及び施設の危機管理を関係者らと共に検討**しながら保存エリアを構築します。



２）複合災害の記憶を未来へ継承するための建築物としてのあるべき姿について -②

『オール福島』と呼べる人づくり・ネットワークづくり

最も難しいのが被災県民の主体形成だと考えます。下記取組により重層的な主体形成（オール福島）を実現します。

基本構想 2016年度

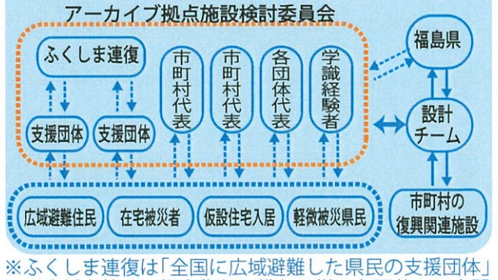
設計等 2017年度

施工等 2018年度 2019年度

開館 2020年度

計画の周知と事業の機運づくり・仲間づくり

①十分な情報提供　②関係市町村毎・各種団体毎に委員を選出し「検討委員会」を構成し、　③被災者に寄り添った合意形成のため、（一社）ふくしま連携復興センター（ふくしま連復）との協力関係を構築、支援団体にも検討委員会への参画を呼び掛け、生の声を拾い上げます。



※ふくしま連復は「全国に広域避難した県民の支援団体」への支援を始め、福島復興に携わる様々な団体への中間支援組織です。　※可能ならば整備主体の垣根を越え復興祈念公園と一体的に考える検討委員会を立上げたい。

【第１回 WS】主旨説明し要望等について意見の吸上げ
【第２回 WS】設計コンセプトとゾーニングの合意形成
【第３回 WS】計画案を元に意見を集約。平面素案完成
【第４回 WS】平面図・模型にて合意形成。計画案の完成

事業サポーター・語り部・運営ボランティア・収蔵ボランティアの育成
「県民の参加気運」の醸成・『福島の復興・福島の記憶集積』